

創立40周年記念式典・シンポジウム ルポ

清田 三紀雄 (株)構造計画研究所)

平成9年6月2日(月)に大手町の経団連会館国際会議場で「21世紀の経営とOR」と題してOR学会創立40周年記念式典・シンポジウムが開催された。

冒頭の挨拶に立たれた近藤次郎氏(記念事業企画推進委員会委員長)は、歴史的なイベントである香港返還をまじかに控え、今回の40周年の節目では記念事業とともに21世紀に向けての学会長期計画の立案を目指したことを強調された。

つづいて、刀根薫氏(日本OR学会会長)による挨拶では、会員数ベースで日本OR学会はIFORS加盟学会中米国について現在2位となっていることを紹介され、これは学会設立以来の諸先輩方の努力の賜物であると、感謝の意を表明された。

来賓の依信彦氏(日本経営工学会会長)は、学会員の半数が企業人と聞いてうらやましく思うとともに、日本版ビッグバンの時期を迎え、日本企業の透明性の向上にORワーカーへの期待が大きいと述べられた。

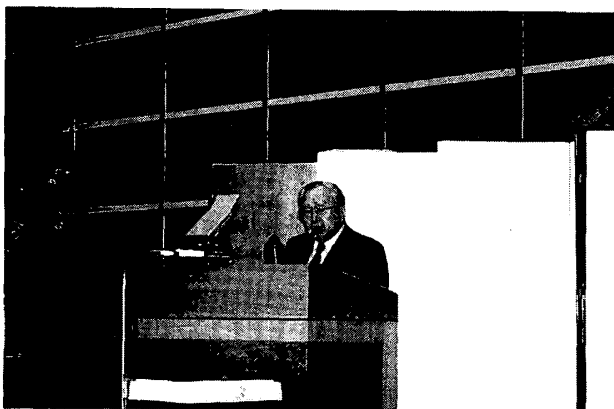
また、鷲尾泰俊氏(日本品質管理学会会長)は、TQCからTQMへの変遷を通して、OR学会との共通部分の拡大が見込まれ、今後研究交流を高めていきたいと述べられた。



国際会議場(記念式典風景)

文部大臣、大和ハウス社長、P. Bell氏(IFORS会長)、各国OR学会会長からの祝電の披露の後、森村英典氏(記念事業実行委員会委員長)より、40周年記念事業(全国6支部でのシンポジウム開催、懸賞論文の状況、大和ハウス(株)の支援による国際交流、専門書シリーズの企画等)について報告があった。

続いて、梅沢豊氏(長期計画委員会委員長)からは、変革期はORにとって躍進の好機であること、創立40周年記念長期計画は22人の委員による11回の会合と10名以上の執筆担当委員のORを愛する心の成果であり、オープンな議論をデジタルな場で実施し、最大の課題である理論と応用の調整を目指し経験科学としての主体性を確立することを目標として15項目の提言とし



近藤委員長挨拶



刀根会長挨拶

てまとめた旨の報告がなされた。

引き続き、「ORの新潮流」と題して、記念シンポジウム第1部が開催された。

まず、刀根薫氏（日本OR学会会長、埼玉大学）から「経営の科学としての新潮流」と題した報告があった。「知の基盤としてのORの確立を目指して」をサブタイトルに、OR発祥直後の40年代から、90年代までを10年ずつに区切ってわかりやすくOR/MSの歴史を解説され、歴史を通して、Model/Algorithm/Applicationのトロイカの重要性を強調された。さらに、経営の科学がもたらしたものは「独創性」と「展開力」と「実現力」の相乗効果による「知」のインフラであり、「知」のインフラとしての活用事例を通して、自由独立の精神のもと、ORとは教育のセクショナリズムを超えた独創性と展開力と実現力の相乗効果を最大限に活用できる「知のインフラの旗手」であると結論づけられた。

続いて、茨木俊秀氏（京都大学）は、「数理計画の半世紀と今後」と題して、スクリーンに投影された学会誌第1号である1957年の「経営科学」9月号の表紙の紹介から始められ、次のような報告があった。（そこにはちょうど50年前にG.B.Dantzigによって提案されたシンプレックス法にまつわる数理計画の話題が多く取り上げられていた）

G.B.Dantzigの「Linear Programming and Extensions (1963)」で述べられた数理計画法の対象分野は現在までに大きく発展してきた。その後の多くの日本人研究者の活躍によって、内点法とその出現に触発されたシンプレックス法の著しい進展があったのは周知の事実である。一方、非線形計画、組合せ最適化問題でのメタヒューリスティック利用にも大きな進歩がみられ、コンピュータの小型化、高速化、低廉化の波を受けて、数理計画は有力な問題解決手法の1つとして今後も重要な役割を果たし続けるとの予想で締めくくられた。

第1部の最後は伏見正則氏（東京大学）から、「確率的モデルとシミュレーションの周辺」と題して報告があった。

待ち行列理論は、環境（特にコンピュータ/通信）の進展に従って、TSS等の計算機の効率的な利用を目指した性能評価を主たる目的として発展してきた。ネットワーク通信や移動体通信の利用が進むにつれ、待ち行列ネットワークに代表されるような待ち行列理論の拡張も進んできた。一方、モンテカルロ法は、シ

ミュレーション言語としてのSIMULAからSmall-Talkの流れとともに、汎用プログラミング言語とのインターフェースを持った専用化、ビジュアル化されたツールが多く輩出されてきた。さらに、モンテカルロ法は不偏推定量と大数の法則に基づき無作為性の保証に多くの努力が払われてきたが、最近では推定誤差オーダの改善を目的として無作為性を意識してはまず準モンテカルロ法の研究が進展し、ファイナンス分野への適用を目的とした研究が進められていることを報告された。（目的とする推定値が乱数シードによって異なる値に収束してしまう例が紹介され、多少シミュレーションに携わる筆者にとっては胆に命ずべき事例であった。）

午後の第2部では「21世紀の経営とOR」と題して、北城恪太郎氏（日本IBM社長）と鳩山由紀夫氏（民主党代表、OR学会評議員）の両氏による特別講演が行われた。

北城恪太郎氏（日本IBM社長）は、刀根、柳井両先生をはじめ大学時代にお世話になった諸先生方を前に、卒論の発表当時に思い出して緊張しているとのジョークで会場を沸かせたあと、ITグローバル化の発展とともに、ORが経営の中でどのように利用できるのか、利用されているのかを中心に、「情報化社会と経営」と題して次のような内容で講演された。

歴史を振り返ると、工業化社会からデジタル革命を通して情報化社会へ変化し、その情報化社会も集中型から分散型をへて現在のネットワーク型社会となった。ネットワーク社会では、ITが市民/家庭環境へ浸透し（まもなくカラーTV普及台数を抜く勢い）、その結果新しい価値が創成されてきつつある。すなわち、ITは社会のインフラとなり、その結果、個人や企業の行動の変化が顕著となってきたのである。

電子株取り引きや流通業におけるインターネット・トラッキング等のネットワーク・コンピューティングでは、アクセス費用は顧客負担だが、顧客の満足度が非常に高いことが特徴である。

このようなネットワーク社会では「ネットワーク社会の3法則」として次のことが言える。

1. 情報の価格は限りなくゼロに近づく
2. 通信の価格は限りなくゼロに近づく
3. 取引処理の価格は限りなくゼロに近づく

この結果、商収益をどこであげて行くかが、ネットワーク社会での企業経営の課題となる。企業組織をフラットにし、低コスト、スピード、高付加価値を目指



特別講演（日本IBM北城社長）

す必要がある。

最後に、IBMでの最適化、データマイニング、Webサービス等の事例を上げ、迅速なモデル生成、高速な近似解法の重要性を強調された。北城氏の持論である「朝令暮改はいいことだ」を引き合いに、ネットワークコンピューティングの活用を通じた経営革新のフロンティアとしてOR学会の果たすべき役割への期待を表明された。

鳩山由紀夫氏（民主党代表、OR学会評議員）は、政治を科学するのが理想であるが、科学を政治している現状を嘆いて会場を沸かせたあと、20世紀自体の経営という観点から、「新時代の政治とOR」と題して、次のような内容で講演された。

官僚主導の科学技術予算の意思決定に政治家や科学者の意見が反映されているとは言い難い現状である。財政改革もカットしやすいところから着手しがちであるが、「夢」のある科学技術予算の獲得を目指し、科学を政治することは重要である。

資源の有限性に対する認識が政治家には特に必要であると考えている。公共財をコストとして考えず、環境を含めた将来像をモデルに含んでいないのが大きな問題と言えよう。科学技術自体は無色だが、古くから生産のための技術として追及してきたところに問題があった。環境管理技術が今後必要となろう。「友愛」とともに「科学的合理性」も政治に求めていきたいので、

ご協力をお願いする。

一般にきつい制約のもとでの最適解は、緩い制約のもとでの最適解よりも非効率である。目的税は国民の理解が得られやすい反面、使途に強い制約を課すので財政の硬直化を招きやすい。縦割行政や族議員といった局所最適解の原因に対抗して全体の最適性を追及していきたい。

鳩山氏の「友愛＝自立と共生」と菅氏の「最小不幸＝最小不条理モデル」はともに、民主党の「リベラル＝小さな福祉政治」を目指すものである。そのために、個の自立と参画を目的としたインターネットによる電子民主主義の試行を企画中であり、ボランティアを募集中である。

最後に、民主党は3年以内に政権をとることを目標



特別講演（鳩山民主党代表）



ダイヤモンドルーム（懇親会風景）

としており、そのために英国で成功したサッチャーイズムの是正を参考に、現政権政党に比べてより過激な主張をしていく覚悟が必要であろう。難しい課題だが、そうであるがゆえに挑戦したい。と、熱意を込めて締めくくられた。

通常のシンポジウムやセミナーの平均年齢よりは若干高めめの雰囲気ではあったが、会場を埋める参加者の

熱気が伝わってきたシンポジウムであった。近藤次郎氏の「有限な資源のもとで、個々の効用を最大化しよう」との挨拶で始まった夕刻の懇親会でも、学会誌1号は実は関西で発行されていたとの新事実の紹介等、興味の尽きないエピソードが紹介され、和気藹々の雰囲気の中、40周年記念シンポジウムの幕は閉じた。

創立40周年への祝電

6月2日開催の記念式典において、総合司会 山田郁夫氏（日本OR学会副会長）から文部大臣をはじめ、IFORS会長 Peter Bell氏他、各国OR学会会長などからの祝電が披露された。

ここにIFORS会長とSecretaryからの祝電（一部省略）とその他の方々のお名前を掲載させて頂き、感謝の意を表わすことといたしたい。

1. Peter C. Bell (カナダ IFORS 会長)

On behalf of IFORS, I would like to extend sincere congratulations to ORSJ on the occasion of its 40th anniversary. ORSJ has been a distinguished and active member of IFORS, and many individual members of ORSJ have played important leadership roles within the international OR community. The 1975 IFORS triennial conference held in two different cities (Tokyo and Kyoto), is remembered fondly by those who attended.

The last 40 years has been a time of great change in OR. From the optimism of the early years, followed by a period of self doubt, OR is now emerging into a bright future. Globalization and competition foster the need for what OR has to offer, and IFORS and ORSJ are well positioned for an exciting future. ……中略……

We look forward to the next 40 years of achievement in operations research from ORSJ and its members, and continuing cooperation between IFORS and ORSJ in developing OR around the world.



2. Helle R. Welling (デンマーク IFORS Secretary)

(前略)

One of my first exposures to the IFORS world took place in Japan in 1973 when I visited there together with the then IFORS President, Professor Arne Jensen, and my predecessor as IFORS Secretary, Mrs. Margaret Kinnard. I recall the warm reception and welcome by representatives of the ORSJ community and by the ORSJ staff at the Gakkai Center Building.

I returned to Japan in 1975 for the IFORS Conference.

It took place in two locations, Tokyo and Kyoto. Today, when I am fully aware of all the details involved in organising such an event, I can only say I don't know how the organising Committee managed all the logistics involved in relocating the Conference …… 2 days in Tokyo and 2 days in Kyoto!!

1975 and Japan was also the official start of my IFORS career since I was appointed IFORS Secretary at the 1975 General Meeting in Kyoto. Throughout all these years I have been enjoying a smooth and